

連絡帳で支援者が相互に成果を蓄積し合う連携に向けた実践

Practice for the cooperation that a supporter accumulates result in notebook for messages mutually

竹原隆文・瀧脇隆志

TAKEHARA Takafumi and TAKIWAKI Ryuji

富山県立となみ養護学校

(Tonami School for Handicapped Children)

Key words: 特別支援教育, 個別の教育支援計画, 連携

目的

個別の教育支援計画は、長期的な視点で一貫した教育的支援を行い、家庭及び地域や医療、福祉、保健、労働等の関係機関が連携することを目的としている。しかし、連携については、十分に活用されていないのが現状である。そこで、家庭との毎日の情報交換ツールである連絡帳を連携のツールとして用い、対人援助学で重視されている、連携において被支援者の「できること」を中心とした記述とその蓄積の効果を検討した。

方法

対象 特別支援学校小学部の学級において、毎日連絡帳にコメントを記載していた1家庭を対象とした。

手続き 2008年4月から2009年7月までの連絡帳に記載されたコメントを c・ :「～ができた」「～してくれた」などのポジティブなコメント c・x :「～できない」「困った」などのネガティブなコメント c・ : 事実の表記だけなどのどちらでもないコメント に分けて月毎の量を測定した。

ベースライン：連絡帳には、学校からと家庭からのコメントを自由に記載する欄のみであった。

介入1・1：連絡帳に行動分析学の三項随伴性（先行条件（ のとき、 を手がかりに、 の支援で）行動、結果）で「できる」を記載する欄を設け、学校と家庭とで児童が「できる」ようになったことを記載し、記載された部分を学校で切り取って ICF-CY（国際生活機能分類・児童版・）の「活動と参加」のコードで分類してファイリングした（以下、「できる」ファイル）。2学期末の懇談会で、「できる」欄と記載方法を説明し、記入例を提示し、3学期が始まった1月の1ヶ月間実施した。

介入2：2月から3月の2ヶ月間、介入1に加え、「できる」ファイルを2週間毎に家庭に提示した。

介入1・2：新年度になり、担任が変わったが、連絡帳の様式を引き継ぐことができた。しかし、「できる」ファイルを家庭に提示するには至らず、結果的に反転デザインになった。

結果

Fig. 1 に示したように、介入1で、連絡帳に「できる」コメントを記載する欄を設けただけではポジティブなコメントの量、ネガティブなコメントの量、どちらでもないコメントの量に変化は見られなかった。介入2で、「できる」ファイルを家庭に提示するようになってからは、ポジティブなコメントの量とネガティブなコメントの量は増加した。どちらでもないコメントの量は減少した。

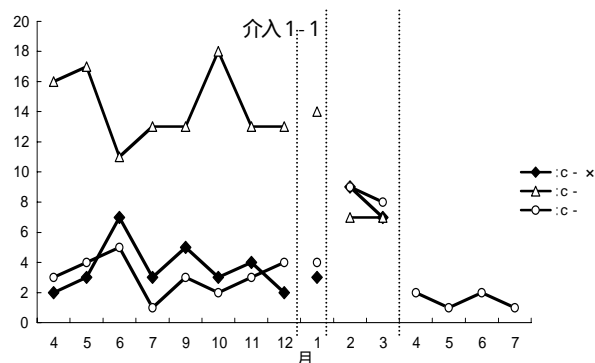


Fig.1 連絡帳のコメント内容の推移

考察

被支援者の「 の支援があればできる」という情報を支援者間で相互に伝達し蓄積することは、支援者の前向きな言語行動を強化する可能性が示唆された。ネガティブなコメントの量の増加については、今後、減少させる工夫をしていく必要がある。また、次の担任にファイリングと提示を移行できなかったことは分類方法の煩雑さなどに原因があると考えられ、支援を移行していくために改善が必要である。

今回の実践を基に、2009年4月から、別の家庭との連絡帳で「できる」欄と「できる」ファイルの実践を行っている。そして、児童が利用するデイサービスなどの関係機関とも「できる」ファイルでの情報交換を行っていることを付記したい。

参考文献: 望月 昭・中村 正・サトウタツヤ(2009)「対人援助学」キーワード集 晃洋書房